

青梅市文化財ニュース

第 1 4 5 号

平成11年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

都市化と野鳥

鳥を区別して、野生の鳥を野鳥とか野禽、人に飼育されている鳥を飼鳥とか家禽などによびます。それらに加え最近では「都市鳥」という言葉も使われ始めています。とはいえこれは、新種の鳥をさすのではなく、人の存在を自分たちの生存のために積極的に利用するようになった野鳥たちのことです。これまで人を避けてきた野鳥が、逆に人や人工物に接近してきているのです。全ての野鳥がそうではありませんが、最近では都会に進出し、スズメは稲作が日本に普及した頃から人に接近したのではないかとわれています。

昭和 58 年 (1983) の初夏、都市 (大手町) の三井物産ビルにある人工池でカルガモが繁殖し話題になりました。カルガモは本来、静かな水辺の草むらに巣を作ります。この頃から、こうした人工的環境でのカルガモの繁殖例が各地で増加していきます。まだ都心での繁殖が珍しかった頃、カルガモが繁殖する池にはガードマンも配置され、カラスやネコやヒトなどの外敵から大切に守られました。三井物産ビルでのカルガモの子育ては、衆人環境の中その後も続けられ、ヒナの巣立ち 8 割近い高いものになっているそうです。

小型のタカの仲間に、ツミという鳥がいます。従来、数が少なく姿を見る機会の少ない鳥でしたが、1980 年代に入り、市街地の公園や狭い緑地での営巣例が急に増えてきました。人通りの多い賑やかな石神井公園で、見物に集まる人を全く意識せずにヒナを育てていた例もあります。こうした市街地で繁殖するツミは、やはり街中に豊富なスズメを捕らえてエサにしていたようです。青梅市内でも、最近、ツミが人家近くの林で営巣していました。ツミと同様、小型のタカのチョウゲンボウも、従来は自然状態の岩場を営巣場所としていたようですが、1970 年代からビルや橋など人工物の隙間を営巣場所利用することが多くなりました。

今では、東京の区部でも繁殖が確認されています。

この他にも、ヒヨドリ、キジバト、コゲラ、ハクセキレイ、カラスなどが都会に進出し、その生活形態を人の作り出す環境や人の心理に合わせるように変化させつつあります。エサと営巣場所が確保されれば、鳥にとって人はもうそんなに恐い存在ではないのかもしれませんが。今年の初夏、市内新町の公園で、巣立ちヒナを連れたエナガの群れを見かけました。この鳥は森林生の鳥で、この辺りでは珍しい鳥といえます。区画整理された住宅地にも、森林生の野鳥が

繁殖できる場所があるようです。公園の樹木が育ち枝が茂って、細い枝に球状の巣を作るエナガにとって条件の良い場所になったのかもしれません。まだ自然状態の良好な青梅ですが、これから街中での野鳥の様子が少しずつ変わっていく可能性があります。身近な野鳥たちの行動や生活を記録して、人の生活や社会の変化と併せみていくと、生き物を通じた考現学のようなものが出来そうです。

(文責 櫻岡)